

「内務省委託本」調査レポート

第3号：石上欣哉『女優情史』のことなど

2012年8月(報告/尾崎名津子)

発行：千代田区立千代田図書館

戦前期の日本では、中央官庁の一つであった内務省が出版物の検閲を行っており、全国で出版されたさまざまな本が内務省に納本されていました。1937(昭和12)年頃以降、内務省で検閲業務に用いられた原本の一部が、千代田図書館の前身である駿河台図書館をはじめとする市立図書館4館に委託されることになりました。当館では、これらの資料を「内務省委託本」と呼び、現在約2,300冊が確認されています。

当館の所蔵する「内務省委託本」は、実際に検閲に使用されたもので、内務省の係官が内容をチェックするために引いた赤線・青線、出版の可否についてのコメントなどが残されています。発禁本は含まれていませんが、当時どのように検閲が行われていたのかを知ることができるという点で、出版史上貴重な資料です。当レポートでは、「内務省委託本」の調査研究により明らかとなった新事実について、様々な切り口からご報告いたします。

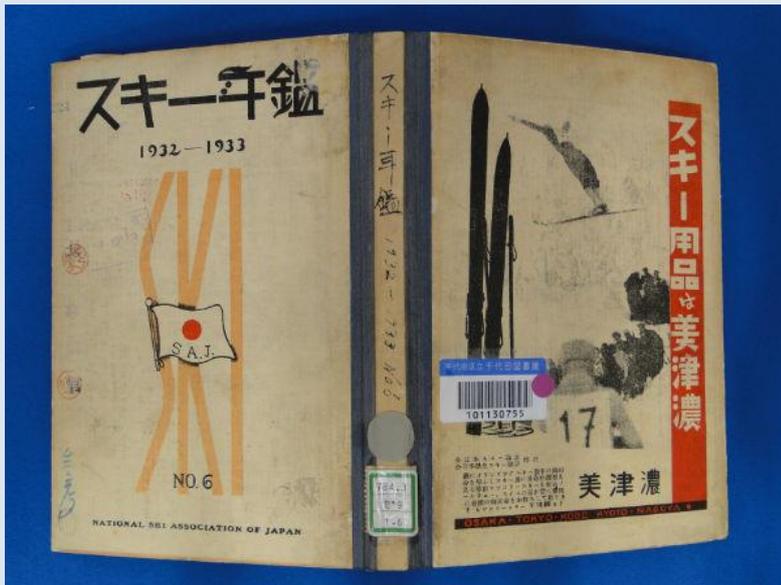
“再製本”された内務省委託本

一口に「内務省委託本」(以下「委託本」といっても、それらが含む情報量には一冊ごとに差異がある。例えばある一冊を手にとったとき「表紙や見返しに検閲作業のために捺された様々な印があり、また検閲官による本文への傍線やコメントも確認できる」というケースは、実は「委託本」の総量と比べればごく少数でしかない。とはいえ、現存する「委託本」のうちコメントがある本は239冊あるという実数を考えれば、その量は決して微小ということではない。

では、先に情報量に差があると述べたのはなぜかという点、「委託本」には再製本されたものが少なくないからである。再製本とは、劣化した本の修理などを目的に、図書館で製本し直すこと。その際、元の表紙や見返しを取り除くことも多く、見返しにあったであろう情報が残念ながら損なわれている場合がある。見返しの情報量の多さについては、安野一之氏がこのレポートの第1号で述べている。



『以緒以後 茅原華山文集』(上) 表紙・裏表紙
茅原廉太郎著(内観社、1929年2月)
再製本された「委託本」の一例。
表紙に「内務省正本」印を確認できる。
千代田図書館所蔵「内務省委託本」



『スキー年鑑 1932-1933』表紙・裏表紙
全日本スキー聯盟編
(全日本スキー聯盟、1932年12月)
本来の表紙を活かした簡易な再製本もある。
検閲作業に使用される印が複数種見られる。
千代田図書館所蔵「内務省委託本」

再製本が多くなされた事情には、次のようなことが考えられる。古い出版物も含む「委託本」は経年劣化が激しく、保存のために再製本がなされたというのも無論一理あるが、ただ書架に置いておくだけではそこまで劣化しないだろう。

実は、昭和初期以降のある時期に内務省から旧東京市立図書館へと渡った「委託本」は、その後ほとんどが一般図書と同じく利用者への貸し出しに供された。ゆえによく閲覧される「委託本」ほど劣化が進み、順次再製本がなされたのだと考えられる。

しかしながら再製本された「委託本」であっても、検閲の内情を物語るものはいろいろある。今回のレポートではそのうち石上欣哉『女優情史』(日月社、1929年7月)について見てみたい。

ゴシップ本『女優情史』

『女優情史』には明治・大正・昭和期の舞台や銀幕で輝いた女優達の、女優となった契機やライバルとの相克、女優としての葛藤、そして名声を得てスターとなるまでの半生記が書かれている。特筆すべきは彼女たちの恋愛や異性との交友まで詳らかにされていることだ。中には性的描写もあり、実在する女優のそのような場面は読者たちのゴシップへの興味を大いに惹きつけたであろう。取り上げられたのは目次の順に、松井須磨子、酒井米子、岡田嘉子、花柳はるみ、栗島すみ子、柳さく子、松井千枝子と、今もなお日本演劇史・映画史に名を残す面々だ。

彼女たちの物語は、まず「主婦の友」昭和2年1月号から連載された。当初タイトルは「大正名女優情史 燃える星影」だったが、半年後には「女優情史」へと改題された。その著者、石上欣哉とは誰かという、実は陸軍軍人から小説家に転身し、少年小説『敵中横断三百里』『亜細亜の曙』などで人気を博した山中峯太郎である。元は軍人であり、戦前の少年たちを熱狂させた作家が、現役の女優達のゴシップ的な読物を提供していたというのは意外の感もある。しかし文芸評論家の尾崎秀樹が『夢いまだ成らず 評伝山中峯太郎』(中央公論社、1983年12月)で明らかにしたところだが、山中には作家転身後、「お金のために」女性雑誌へ様々な文章をまさに書き散らしていたという過去があった。多くは女性を対象とした短篇小説だったが、変名を使い『女優情史』を連載して当たりを取った点に、山中の生活人としての強さや読者のニーズを見抜いたたかさが窺える。

「内務省委託本」としての『女優情史』

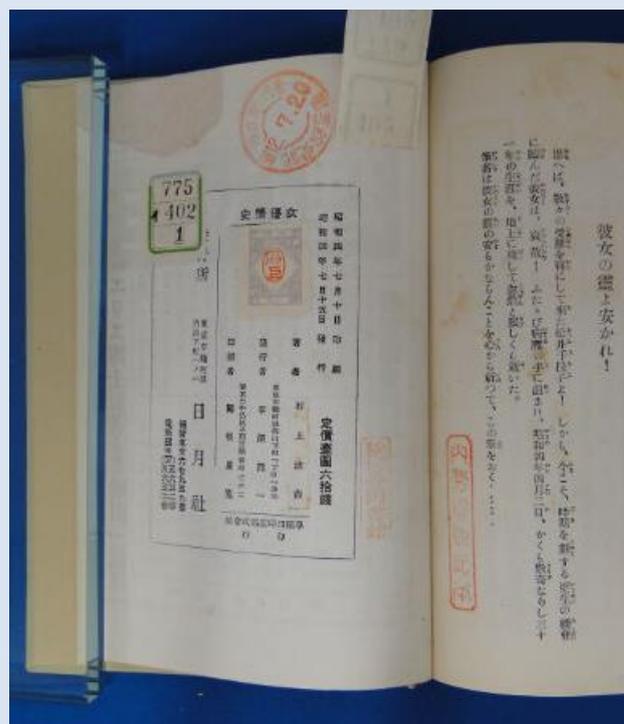
『女優情史』が駿河台図書館(現・千代田区立千代田図書館)へ「委託」されたのは昭和12年7月20日である。同じ日付の印が捺された「委託本」は多く、同時期にまとめて相当数の書籍が「委託」されたと推測できる。現存する『女優情史』は再製本されており、その際に表紙や見返しなどが削除されたため、内務省側の管理印や検閲官の係印は認められない。しかし、本文には赤鉛筆で引かれた傍線を見ることができる。



『女優情史』(左)標題紙、(右)奥付

石上欣哉著(日月社、1929年7月)
再製本されているが、奥付には「内務省委託本」印が確認できる。
これは紛れもなく「委託本」である。

千代田図書館所蔵「内務省委託本」



この本の内容的な目玉ともいえる、女優の恋愛や婚姻など秘められた異性愛のエピソードや、未婚での出産などに関する具体的な記述が、風俗壊乱にふれる可能性のあるものとして検閲官の目に留まったのは当然といえる。本文に数多く残されている赤鉛筆での傍線箇所は、このような記述の部分に限られている。しかもそれは「松井須磨子」「酒井米子」「岡田嘉子」の冒頭から三章分にしか認められない。その理由もいろいろと想定できる。

一つに、検閲官が読み進めるなかで「風俗不問」の判定を早々に下したため、最後まで読まれなかったことが考えられる。日々膨大な量の出版物を検閲官として「処理」しなければならない彼らにとって、緻密な読解はおおよそ不可能だったのではないか。また彼らは毎日の膨大な業務を通して、禁に触れそうな著者や出版社をそれとなく学んでいただろうし、それに当てはまらない本へのチェックは多少なりとも緩められたとも推測できる。

また、婦人雑誌の連載物だった『女優情史』において、連載途中で石上＝山中の書き方が変質したことも考えられる。「主婦の友」誌上では「岡田嘉子」と「花柳はるみ」との間、発表時期に数ヶ月の開きがあり、その間に「扇情的な読み物から、表面上は女性の教化を装う読み物へ」という編集方針の転換があったのかもしれない。「花柳はるみ」の章以降でも、内容には処女喪失・未婚での妊娠などが含まれるが、きわどい場面の記述は以前より間接的な表現になっている。

あるいは第三の可能性として、女優たちの所属映画会社の影響があるかもしれない。刊行当時、前半に登場する松井須磨子は既に故人、酒井・岡田は日活の所属である一方、後半の花柳は無所属だが、栗島・柳・松井千枝子は当時松竹に所属していたというように、日活と松竹とでほぼ二分できるのである。

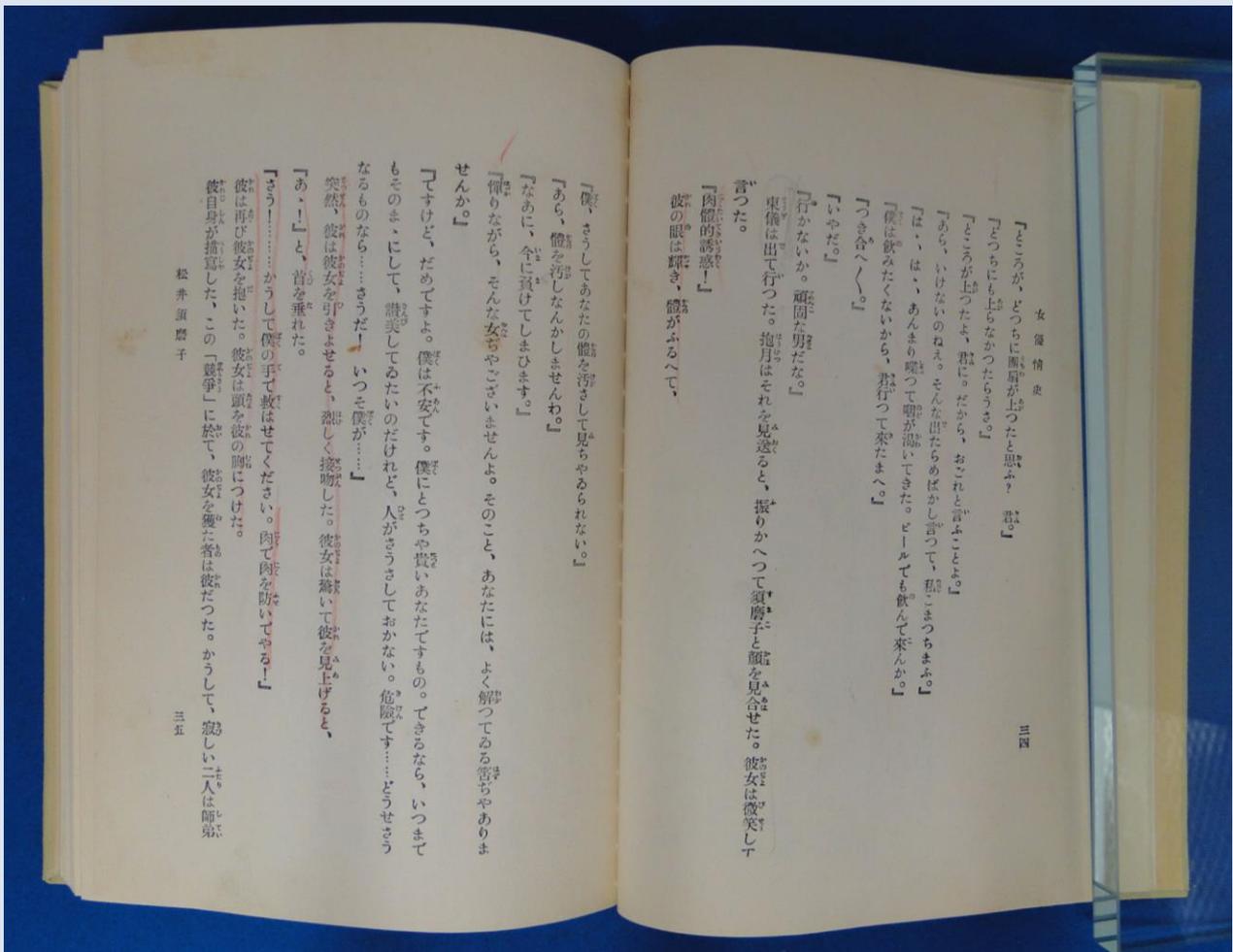
傍線はどこに引かれたか

では実際に、赤鉛筆で傍線が引かれた箇所いくつかを挙げてみたい。

突然、彼は彼女を引きよせると、烈しく接吻した。彼女は驚いて彼を見上げると、『あゝ！』と、首を垂れた。

『さう！……………かうして僕の手で救はせてください。肉で肉を防いでやる！』
彼は再び彼女を抱いた。彼女は頭を彼の胸につけた。

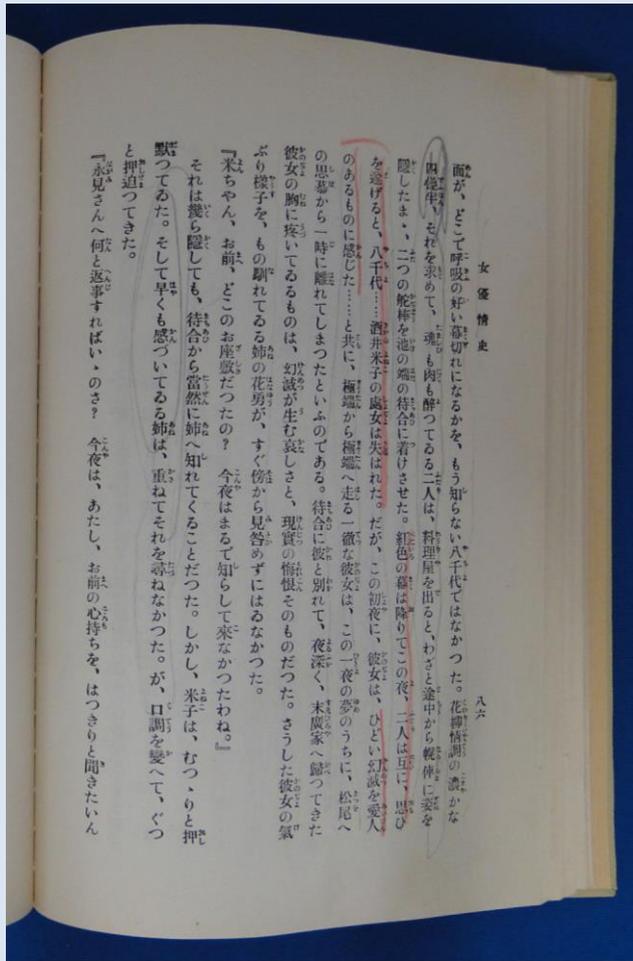
(「松井須磨子」35頁)



『女優情史』 pp.34-35

石上欣哉著(日月社、1929年7月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」



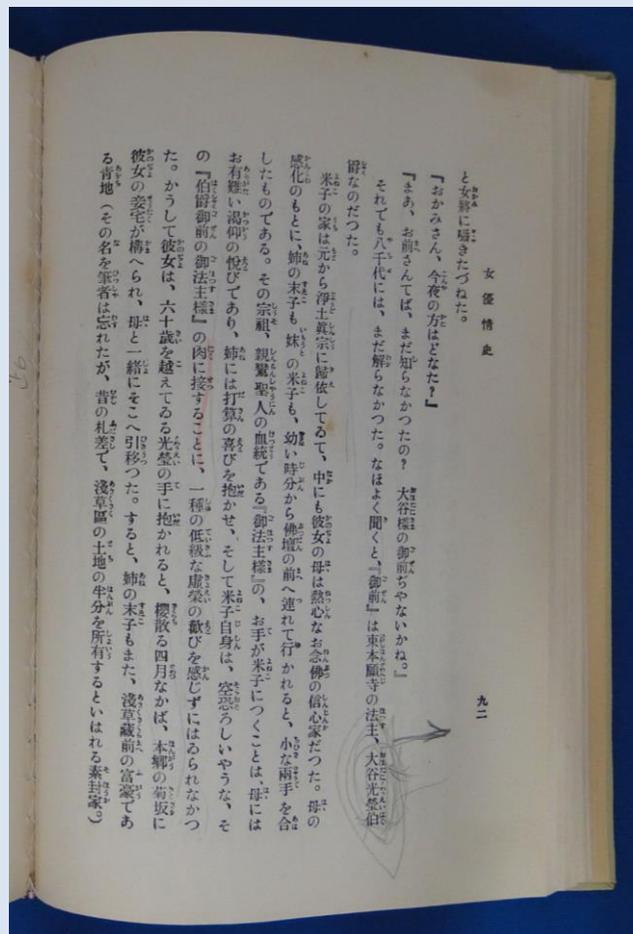
紅色の幕は降りてこの夜、二人は互に、思ひを遂げると、八千代……酒井米子の処女は失はれた。だが、この初夜に、彼女は、ひどい幻滅を愛人のあるものと感じた……

(「酒井米子」86 頁)

『女優情史』 p.86

石上欣哉著(日月社、1929年7月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」



…米子自身は、空恐ろしいやうな、その『伯爵御前の御法主様』の肉に接することに、一種の低級な虚栄の歎きを感じずにはゐられなかつた。

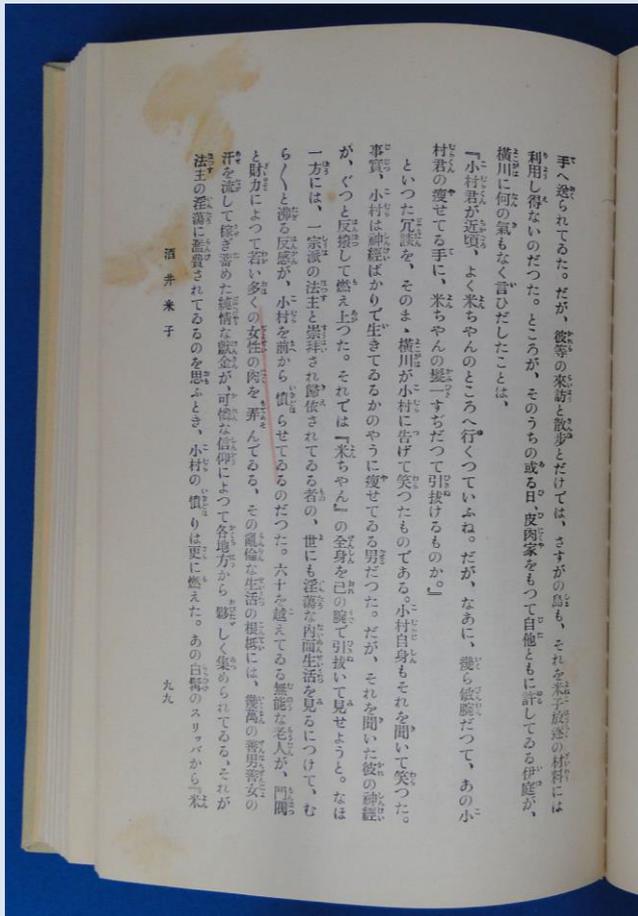
(「酒井米子」92 頁)

『女優情史』 p.92

石上欣哉著(日月社、1929年7月)

黒鉛筆による線や囲みは閲覧者によるものと考えられる。

千代田図書館所蔵「内務省委託本」



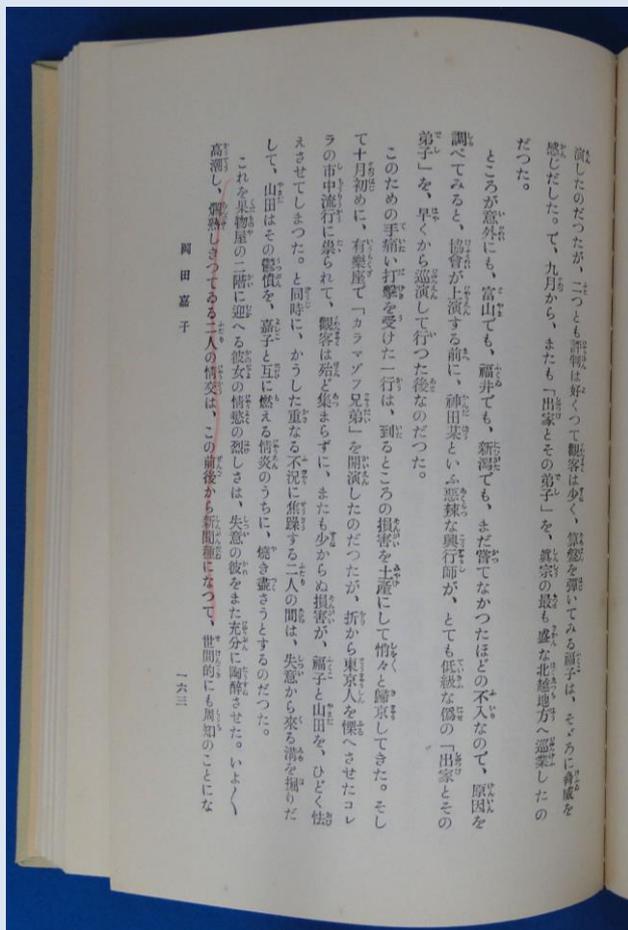
六十を越えてゐる無能な老人が、門閥と財力によつて若い多くの女性の肉を弄んでゐる、その乱倫な生活の根底には、幾万の善男善女の汗を流して稼ぎ蓄めた純情な献金が、可憐な信仰によつて各地方から夥しく集められてゐる…

(「酒井米子」99 頁)

『女優情史』 p.99

石上欣哉著(日月社、1929年7月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」



…爛熟しきつてゐる二人の情交は、この前後から新聞種になつて、世間的にも周知のことになつた。

(「岡田嘉子」163 頁)

『女優情史』 p.163

石上欣哉著(日月社、1929年7月)

千代田図書館所蔵「内務省委託本」

女優の直接的な情交の場面にチェックが入るのはもちろんのことだろう。特に多く情交の場面が書かれるのは酒井米子の章だが、その中でも「肉」(肉体を示す)という語には検閲する側も敏感になっている様子が窺える。一方で「肉」よりも「愛慾」という語が頻繁に書かれているものの、こちらは傍線が引かれていない。また「淫蕩」も「愛慾」と同様だった。現在からすれば「愛慾」「淫蕩」は情交を連想させるに等しい用語だと思うが、これらが問題にされないのは、当時と現在とで用語の意味内容が異なっているとも、検閲官個人の裁量とも考えられる。あるいは、より直接的な表現のみチェックを入れるという検閲の方針があったのかもしれない。

内務省検閲の基準を窺える資料としては、『出版警察報』(複製版、不二出版、1981-1982年)や元検閲官たちの手記などが挙げられるが、具体的で詳細な基準まで明らかになっているとはいえない。また、基準がどのような手続きで設定されたのかもわからない。それゆえに“「肉」と「愛慾」”の場合のように、結果的に判断・評価できない事態が生じてしまうのが悩ましい。けれども、そもそも風俗壊乱の基準はその時代ごとの風潮やモードに合わせていかようにでも変わり得るものだから、このようなチェック箇所を「委託本」全体から挙げ、整理することで、風俗壊乱にまつわる検閲基準の仔細な部分を逆照射できるのではないか。

おわりに

「内務省委託本」は、その全てに検閲官のコメントや傍線が記されているわけではない。むしろそのような本は少数である。『女優情史』は検閲官による傍線が比較的多いが、それでもこれだけでは検閲の実態について何か確実なことが言えるというものではない。しかし、その一冊を通して読み、本の外部の情報を取り入れることで、その本が示す様々な可能性を引き出し、考えることができる——例えば『女優情史』と実際に風俗壊乱のかどで発売頒布禁止処分になった書籍とを見比べつつ、「男性を読者と想定した本だと「淫本」かどうかを厳しく審査されるが、女性が読者となる本では性に関する記述のチェックが緩くなるなど、書籍が対象とする読者層によって検閲の精度にも差が出たのではないか」といった仮説を立てることもできる。これが「内務省委託本」に触れる愉しみだ。

---Written by-----

尾崎名津子 1981年生

慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得退学

慶應義塾大学通信教育部科目担当員、大妻女子大学比較文化学部非常勤講師など

2007年から内務省委託本の調査・研究に取り組んでいる。

千代田図書館蔵「内務省委託本」のご利用について

- 「内務省委託本」は閉架書庫に保管しており、事前に申請いただければ、どなたでも閲覧・撮影いただけます。
- 検索には、千代田図書館ホームページから「内務省委託本検索システム」、もしくは『千代田図書館蔵「内務省委託本」関係資料集』掲載の目録をご利用ください。(OPAC、Web-OPACには対応していません)
- 詳しくは図書館職員までお問い合わせください。

発行：千代田図書館「内務省委託本」研究会 ※本資料内容の無断転載はご遠慮ください。

お問い合わせ：千代田図書館・企画「内務省委託本」担当 電話 03-5211-4290